様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月３１日現在

機関番号：12701
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520463
研究課題名（和文）　自己モニターを活用した音声教育教材の作成に関する研究

研究課題名（英文）　The Study on the Learning System for the Pronunciation Teaching Utilizing Self-monitoring

研究代表者
河野　俊之（KAWANO TOSHIYUKI）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：60269769

研究成果の概要（和文）：教師がモデル音声を発し，リピートさせ，必要に応じて説明を加えるだけの，従来一般に行われている音声教育方法では，期待するほどの効果が上がっていない。そこで，学習者自身が自己のパフォーマンスのどこが問題であるかを認識し，妥当な発音基準を模索しながらそれをもとにした適切な自己評価を通して発音を自己修正する音声教育の実践を行い，その効果的な方法を考察した。また，教師に必要とされる能力について考察した。さらに，それに必要な教科書を作成し，特に，e-learning 教材を試作した。

研究成果の概要（英文）：We made the textbook for Japanese pronunciation utilizing self-monitoring and studied teacher's skill for using it. Moreover, we developed the e-learning system that can make up for the disadvantage of large classes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本語教育
科研費の分科・細目：教育工学・教材・教育メディア
キーワード：教師論，教授法，教材・教具論，音声教育

１．研究開始当初の背景

日本語教育において，音声教育は学習者のニーズが高いにも関わらず，あまり行われていない。そして，音声教育が行われていても，従来広く行われている，モデル音声を提示し，リピートさせ，必要に応じて発音について説明し，さらにリピートさせるという付け焼刃的な音声教育では期待した効果が得られていない。そこで，従来とは異なる音声教育方法の開発が必要であった。

小河原(2009)などは，学習者自身が自己のパフォーマンスのどこが問題であるかを認識し，妥当な発音基準を模索しながらそれをもとにした適切な自己評価を通して発音を自己修正する，自己モニターを活用した音声教育方法を提唱している。

２．研究の目的

(1) 自己モニターを活用した音声教育の理念については，理解されつつあるが，その実践については，教師に高度な知識や技能を必要とすることや，教師が既に持っている信念の異なることなどから，躊躇する教師が多い。また，従来の方法と比べて，その効果についてやや懐疑的な意見もある。そこで，自己モニターを活用した音声教育を実際に行い，そ

の効果的な方法の開発を行う。

(2) 教育方法の紹介については，提言だけでは不十分であり，具体的な教材の提供が重要であると考える。そこで，自己モニターを活用した音声教育を行うのに効果的な教材の開発を行う。

(3) 教育方法の開発を行っても，それを使用する教師の知識や技能が伴わなければ，効果的な使用が期待できない。そこで，自己モニターを活用した音声教育を行うことができる教師養成プログラムの開発を行う。

(4) 自己モニターを活用した音声教育を行うための教材として，紙媒体では不十分な部分も大きい。例えば，十分にモデル音声を聞くことができないことなどである。そこで，e-learning 教材の開発を行う。

３．研究の方法

(1) 実際にメンバーや協力者が自己モニターを活用した音声教育の実践を行った。

(2) (1)などに基づき，紙媒体の教材を作成し，適宜，修正していった。

(3) (1)のうち，特に，実習生の授業ビデオや内省を分析した。

(4) (2)を元に,e-learning 教材を試作した。また，教室活動を再検討することなどで，修正していった。

４．研究成果

(1) 雑誌論文③において，自己モニターを活用した音声教育の実践を公開した。「ショ」と「ソ」及び「腿」と「桃」を材料とし，自己モニターを活用した音声教育活動を行い，それを CD-ROM に収録した。また，雑誌論文では，自己モニターを活用した音声教育の具体的な方法に関する解説のみならず，理論的背景や従来の音声教育や教師の問題点などについても述べた。また，日本語発音の問題点について，学習者の母語別に解説した。これらにより，自己モニターを活用した音声教育の実践について，多くの日本語教師に理解されたと考えられる。

　また，雑誌論文②において，従来の音声教育との比較をした。FOCUS を用いて，音声教育活動を分析したが，従来の方法では，教師の説明が大部分を占め，教師によるモデル音声などの後に学習者がリピートするパターンになっていることが分かった。次に，自己モニターを取り入れた音声教育活動の分析し，学習手段が多様であることや学習者に考える機会を多く与えていることなどが分かった。

(2) 紙媒体の教科書を完成させ，修正を行った。また，図書②において，音声教育における教科書の重要性について指摘した。教科書のような具体物をもって議論することで，議論が具体的で生産的になるからである。具体物がない議論は，抽象的にならざるを得ず，そのため，ビリーフのぶつかり合いに終始してしまいがちである。

(3) 図書②において，実習生による授業の問題点を指摘し，教師に必要な能力について考察した。また，学会発表①③④において，広く公開した。実習で見られた実習生の問題点等について，DOs（するべきこと）& DON'Ts（してはいけないこと）としてまとめると，以下のようになる。

DOs

０－１
- ふだんの発音をさせる。
- 読み間違いは，もう一度発音させる。

０－２
- 問題となる音をチェックさせる。
- やり方をきちんと理解させる。
- ×や●を書いたときは，そこで止めて，その理由などを聞く。
- どの項目が難しいかを聞く。

０－３
- 問題となる音を厳しめにチェックする。
- 扱う項目，順番を考える。
- 他の人とも聞く。

１－１
- チョーク，ペンで色を分けて板書する。
- ペアで示す。
- じゅうぶんに聞かせる。
- 間を空けて，学習者を見ながら，ゆっくり聞かせる。

１－２
- モデル音声の出し方について配慮する。
- いろいろな話者のものを聞かせる。

１－３
- クラスとソロを使い分ける。
- ソロの場合，順番を考慮する。

１－４
- 学習者に問いかける。
- 「独自の基準」を考えさせる。
- 「独自の基準」を書き留めさせる。

１－５
- 「独自の基準」を話し合わせる。
- 「独自の基準」を発表させる。
- 発表された「独自の基準」について，学習者にさらに問いかけ，明確にする。

２－１
- まず，間を空けて，学習者を見ながら，ゆっくり聞かせる。

２－２

- 学習者にどちらかを言わせ，どちらを言ったかを札で示させる。
- 考える時間をじゅうぶん与える。

２－３（２－４，２－５へ続く）

- 発音に問題がない場合，A，Bのどちらであるかを示す。
- 発音に問題がある場合は，A，Bのどちらであるか，あるいは，A，Bの両方や，板書の×などで示す。
- 学習者同士で，活動を行う。
- 学習者に問いかける。
- 「独自の基準」を考えさせる。
- 「独自の基準」を書き留めさせる。

- 日本語や学習者の母語の発音に関する情報を集める。

DON'Ts

０－１

- 緊張させる。

０－３

- 問題のあるものだけをチェックする。
- ターゲット音だけをチェックする。
- 扱う項目，順番を決定してしまう。

１－１

- A，B とそれに対応する音を板書しない。
- A，B の札を左右逆に持つ。

１－２

- 極端に発音する。

１－３

- 学習者が A，B の札を左右逆に持つ。
- 完璧になるまで続ける。

１－４

- 聞き分けられていないときに，「独自の基準」作りを強要する。
- 「独自の基準」を教師が先に提示する。

１－５

- 「独自の基準」を書く前に話し合わせる。
- 「独自の基準」を誘導する。
- 教師が「音声学的におかしい」等と言う。
- 「独自の基準」を勝手に解釈する。

２－１

- いきなり発音させる。

２－２

- 発音するべき音を教師が示す。

２－３（２－４，２－５へ続く）

- 判定を甘くする。
- 音の変化に気づかない。指摘しない。

これらから，自己モニターを活用した音声教育を行う上で，教師に必要な能力を以下にまとめる。

ａ）手順をきちんと踏む能力。その際，表面上，手順を踏むだけでなく，学習者をよく観察し，学習者の学びを把握することが重要である。

ｂ）しかし，手順にこだわってはならない。学習者をよく観察し，臨機応変に対応する能力が必要である。

ｃ）協働的学習を考慮すること。そのためには，学習者をよく観察する能力が重要である。

ｄ）学習者に「独自の基準」を述べさせるだけなく，さらに問いかけ，明確化させていく能力。

ｅ）しかし，「独自の基準」を明確化させていく際に，学習者の意図を把握して明確化させなければならない。学習者の意図と異なる方へ導いてはならない。そのためには，学習者の発話やジェスチャーなどに気を付けること，音声学の知識を身に付け，活用できるようにすることが必要である。

ｆ）学習者の発音が，標準的な日本語の音にない場合は，それを聞き取り，模倣できる能力が必要である。そのためには，学習者の母語の音声に関する知識を持つことやその情報にアクセスする能力が必要である。

(4) moodle を用いた e-learning 教材の開発し，試行し，e-learning 教材であることの長所を考察したり，それらを元に，よりより音声教育活動とは何かについての考察を行った。雑誌論文①，図書①②などで広く公開した。ガニェの９事象に照らし合わせ，自己モニターを活用した音声教育活動の点検を行った。その結果，e-learning 教材は，紙媒体教材に比べ，以下の長所があることが分かった。

- 発音チェック：教師が１人１人呼んで，録音ボタン，停止ボタンを繰り返し押しながら録音し，それらの音声を探し当て，再生ボタン，停止ボタンを繰り返しながら聞いて評価するよりもかなり簡便であり，また，学習者もそれらの音声を自由に聞くことができる。また，活動自体も，学習者一人で自分のペースに合わせることができる。
- 聞き分ける練習：他の学習者や教師に気兼ねすることなく，何度でも練習することができる。教室ではもっとモデル音声を聞きたかったり，もっと多く練習したかったりしても，それがかなわないことが多い。
- 聞き分ける練習：モデル音声が男女計６名分用意されており，様々な音声を用いて練習することができる。教室では，教師１名のモデル音声のみが用いられることが多い。
- 聞き分ける練習・言い分ける練習：「フォーラム」を用いて，「独自の基準」を書き込んだり，他の学習者がそれに返信したりすることで，「独自の基準」を共有することができる。
- 言い分ける練習：学習者が録音した音声を録音直後に聞くことが簡便である。教室では，パフォーマンスの結果である音声を学習者自身で確認することができない。
- その他：教室で扱っていない物や教室でかなり以前に扱った物についても，学習者自身がニーズに応じて学ぶことができる。

しかし，e-learning 教材でも，克服が難しいものもある。例えば，「3. 前提条件を思い出させる」について，「ショ」－「ソ」の聞き分けの前提条件自体が何であるかは決して明確ではない。どの学習項目がどの学習項目の前提条件となりうるかについて，自己モニターのしやすさや独自の基準の類似性，音声的な類似性，習得順序などから検討していく必要があると考えられる。また，その研究は，従来の音声教育ではあまり考慮されていない，学習項目の提出順についても応用できると考えられる。これらのことから，さらに，従来の音声教育における問題点を再検討していくことや，e-learning 教材をよりユーザビリティーの高いものにしていくことなど，新しい課題が明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 河野俊之，自己モニターを活用した音声教育とそのためのｅラーニング，日本語教育方法研究会誌，査読有，Vol.17，No.2，2010，14-15
② 河野俊之，音声教育活動の授業分析，横浜国大国語研究，査読なし，27号，2009，35-50
③ 河野俊之，60分でわかる音声指導入門，月刊日本語，査読なし，2009，12-29

〔学会発表〕（計９件）
① 河野俊之，自己モニターを活用した音声教育とその教材，韓国日本語学会　第２３回国際学術会議，20110309，　建国大学校
② 河野俊之，自己モニターを活用した音声教育とそのためのｅラーニング，第35回日本語教育方法研究会，20100911，金城学院大学
③ 河野俊之・秋山實・高橋美紀，自己モニターを活用した音声教育のためのｅラーニング，2010世界日本語教育大会，20100801，台湾国立政治大学
④ 河野俊之，自己モニターを活用した音声教育，2010年全国高校日本語円卓会議及び日本語教授法問題会議，20100530，華東師範大学
⑤ 河野俊之，自己モニターを活用した音声教育，第23回ハノイ日本語教育セミナー，20100411，ベトナム日本人材協力センター
⑥ 河野俊之・秋山實，自己モニターを活用した音声教育活動の点検，沖縄県日本語教育研究会2009年度第3回研究発表会，20100309，琉球大学
⑦ 河野俊之・高橋美紀，音声教育の実践とその研究手法 ―教科書や指導書の作成を目標として―，日本語教育学会　実践研究フォーラム，20090801，早稲田大学
⑧ 河野俊之，自己モニターを用いた音声教育活動－実習生との比較－，沖縄県日本語教育研究会，20090307，琉球大学
⑨ 河野俊之，自己モニターを用いた音声教育活動における教師の役割，日本語教育学会 2008 年度第 2 回研究集会,20080621，沖縄国際大学

〔図書〕（計３件）
① 小河原義朗・河野俊之　，アルク，日本語教師のための音声教育を考える本，2009，146
② 河野俊之・小河原義朗編著，凡人社，日本語教育の過去・現在・未来 第４巻 音声，2009，220
③ 河野俊之・金田智子編著，凡人社，日本語教育の過去・現在・未来 第２巻 教師，2009，222

〔その他〕
ホームページ等
http://j-pronounce.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
河野　俊之（KAWANO TOSHIYUKI）
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：60269769
(2)研究分担者
小河原　義朗（OGAWARA YOSHIRO）
北海道大学・留学生センター・准教授
研究者番号：70302065

(3)連携研究者
なし